SCJ 61. Myanmar



<特集> ミャンマーのお母さんたちの愛











支援地の子どもたちとお母さん 2012年9月 ミャンマー テゴンとクンジャンゴンの村々にて　Photographer: Sai Thiha Soe/Save the Children Japan

「おかあさん、アェン チッテ!」

いつもご支援をありがとうございます。今号の特集国はミャンマーです。
ひょうきんな子におっとりした子、好奇心いっぱいな子に恥ずかしがりな子。
ここミャンマーでも、子どもたちは個性的です。そして、みんなに共通しているのは、
お母さんのことが「アェン チッテ!*」、「と〜っても好き」ということ! そんな子どもたちのことが、
お母さんたちは愛おしくて、とにかく何より健康に育ってほしいと心から願っています。
ですが、ミャンマーの、特に農村部で子どもを守り育てることは容易ではありません。
診てもらえる病院がすごく遠かったり(歩いて8時間もかかる人がいたり)、
相談のできる保健の専門家がいなかったり、自分自身に保健衛生の知識が
十分になかったりして、お母さんたちは子どもが病気になった時、大変とまどうのです。
そういうお母さんたちの心配や苦労を少しでも取り除くために、
SCJは、従来の栄養支援に加えて、母子保健の支援を2012年から始めました。
それは、病気になった子どもを一人ひとり探して治療する方法でなく、まずは、子どもを持つ女性たちが
中心となって健康管理できる環境を整える支援です。そのために、より専門的な知識を持って
出産・子育ての相談にのれる保健ボランティアを育成し、地元の助産師や保健行政と協力しながら、
地域全体で子どもの命を守り育てる支援に取り組んでいます。今回は、支援地の女性たちの声を通して、
子どもをめぐる現状や支援のことを皆さまにも知っていただけましたら幸いです。

*:「アェン チッテ」はミャンマー語です。
SCは、セーブ・ザ・チルドレンの略です。SCJは、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの略です。

Myanmar

「私は、今度こそ、子どもの命をあきらめません」

Mother's Love to Child





支援地に暮らす
キム・モー・エーさんに
お会いしました。

ミャンマーの最大都市ヤンゴンから北西へ約230キロ離れた中央乾燥地帯に、SCJの支援する村々があります。テゴンと呼ばれるこの一帯の1日の平均収入は800チャット。日本円で80円ほどです。

シンルー村に暮らすキム・モー・エーさんは、日雇い労働のご主人と息子のゼヤ・ミンくんとの三人暮らし。今年9月に訪問した際、ご自身の過去の経験を聞かせてくださいました。「実はゼヤ・ミンを授かる前に、二人の子どもを共に生後2ヶ月で亡くしています。二人とも便が突然出なくなり、私はどうすればよいか分からず母乳を与えることをやめたのです。私自身もどんどん痩せていき、何もする元気がなくなりました」子どもが死に直面しているにも関わらず、助けを求める知識もお金もなく、赤ちゃんたちは亡くなっていったそうです。「3人目のゼヤ・ミンも同じように、ある日便が出なくなって、私はとても慌てました。でもその時は、近所の人が『病院に行った方がいいよ』とアドバイスしてくれ、息子を自宅から13キロ離れた病院まで連れて行きました。小児科で診てもらい、薬をもらうことができました。あの日、困っている私に近所の人が教えてくれたことは、とても基本的なことでしたが、私にとってはとても重要なことで役に立ちました。感謝しています」



SCJは、
キム・モー・エーさんの
力になります。

お話をしてくださる間、一度も気持ちを取り乱さず、淡々と話をしてくださったキム・モー・エーさんですが、亡くした赤ちゃんたちの命とゼヤ・ミンくんを想う気持ちがヒシヒシと伝わってきました。その彼女にSCJの支援のことも聞いてみました。「子どもが病気になった時にすぐに相談できる人が身近にいてくれることは、とても嬉しいし心強いです。私にはたよる親も親戚もいませんから。私自身も、以前なら子どもが亡くなるのをただ待つことしかできませんでしたが、今度子どもが病気になったら、保健ボランティアに助けてもらいながら、何としても子どもに治療を受けさせてあげたいと思っています」



Midwife

「お母さんとの信頼関係を第一に、
命の誕生の喜びを共有しています」

助産師 ドウ・サム・ノウェさん（57歳）





「妊産婦検診と出産の介助、
出産後のケアが私の主な業務です。
保健ボランティアの指導も
担当しています。
妊娠・出産の時は心のケアも
非常に大事です」

Health Volunteer

「一人の子どもも亡くならない、
そんな村をつくりたいです」

保健ボランティア
ジン・メイ・ルイム・ウーさん（18歳）





「発熱や下痢、肺炎など
小児感染症の応急処置と
予防法を広め、重い病気の時は
病院への照会をします。
将来は看護師になることを
希望しています」

more Information

母子保健の支援について、より詳しく。





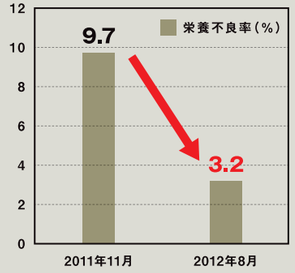
2012年3月から支援を開始しました。対象はバゴ、ヤンゴン、マグウェイの3地域の300村です。保健人材の育成と地域住民の参加を活動の中心とし、妊婦検診や破傷風ワクチン接種、安全で衛生的な出産の啓発などを行うボランティアと、疾病予防や小児感染症の応急処置と医療機関への照会などを行うボランティアを、地元の医療専門家と連携して育成しています。さらに、保健センターの建設なども予定しています。ちなみに、ミャンマーにおける乳幼児死亡率は、1,000人のうちの66人、そのうち、1歳未満児の死亡が76%を占めていますが*、妊婦検診や産後ケア、完全母乳育児の推進や栄養指導など適切な介入があれば、子どもの死亡を防ぐことができます。

*:『世界子供白書2012』による2010年の統計

栄養・生計向上の支援で成果が出ています。

こちらの支援は、バゴ地域テゴン・タウンシップの60村で実施しており、家庭菜園や養鶏の取り組みのほか、適切な栄養知識の提供、乳幼児の母乳育児・補助食の実践、栄養不良の子どもの成長回復プログラムなどを行っています。直近(2012年8月)に実施した栄養不良率の調査で、暫定値ではありますが、事業対象地に居住する5歳未満児527名のうち、14名が中度栄養不良で、3名が重度栄養不良と測定されました。したがって、栄養不良率は「3.2%」となります。活動開始前(2011年11月)は9.7%でしたので、栄養不良率を3分の1まで削減することができ、一定の成果を上げました。







今回お伝えしたミャンマーの母子保健と栄養・生計向上の支援活動は、外務省・日本NGO連携無償資金協力により実施しています。

＊栄養・生計の支援＊
NUTRITION AND LIVELIHOOD

Mother's Love to Child

「みんなで仲良く助け合い、野菜や鶏を育てています」



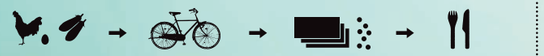
娘のチー・ピュー・キムちゃん(4歳)は、恥ずかしがって前を向いてくれませんでした。

母
チー・チー・ウさん
(33歳)

SCJは、同じテゴンの村々で、子どもの栄養改善の活動を行っています。その取り組みの1つが、地域の方々が共同の家庭菜園を管理したり鶏を養って、新鮮な野菜や卵など、子どもたちが口にする食事のバリエーションを増やして栄養を摂ってもらおうというもの。地道な活動ですが、努力が実を結んでいるようで、マウピンクェ村のチー・チー・ウさんも、「次の世代に引き渡せる菜園を作りたい」と、仲間といっしょに活動に取り組んでいらっしゃいます。「私は家庭菜園づくりのリーダーとして、2011年の末から20人のメンバーとチームで野菜を育てています。出来た野菜は、支給された自転車で売りに出かけたりもします。行商のおかげで現金収入が増え、貯蓄ができるようになりました。さらに、利益の一部で新しい種や自転車を購入したり、肉や豆といった食材を買って、栄養不良の子どものいる家庭に配布していきたいです」とのこと。もちろん新鮮な野菜は、畑から直送で自分の子どもにも食べさせています。「娘の体重がなかなか増えなくて心配していましたが、野菜を摂取するようになってから体が丈夫になったと思います。娘は特に長豆やクレソンが好きです。2012年の2月に12.4キロだった体重は同年9月には15.8キロに増えました!」









Japan
［ 日本 ］

東北から世界へ、子どもたちが声をあげています。

東日本大震災復興支援事業において、“Speaking Out From Tohoku～子どもの参加でより良いまちに！～”を実施し、子どもまちづくりクラブや子どもたちの声を収集する調査などを進め、子どもたち自身が復興やまちづくりに声をあげ、参加する機会を作っています。2月、子どもたちは復興大臣に意見書を提出。7月の世界防災閣僚会議では、ワルストローム国連事務総長特別代表と直接対談し、提言書を発表しました。私たちはこれからも、子どもたちの活動を応援し続けます。



Japan
［ 日本 ］

福島に事務所を開設しました。今後も、ますます充実した活動を目指します。

福島県では震災直後から、子どもや地域の方々とともに復興支援活動を行っています。子どもたちが安心して遊べる安全な遊び場の提供、農業・水産系高校の生徒への奨学金支援、助成金プログラムを通じた学校の部活動やスポーツ少年団の活動支援を展開中です。こうした活動を一層充実させていくために、2012年4月には会津若松事務所を開設しました。これからも福島の子どもたちの声に耳を傾け、地域の皆さんとともに歩んでいきます。



India
［ インド ］

デジタル印刷機が設置されて、「勉強の時間が増えました！」

株式会社リコーとの協働による教育支援事業は2年目です。デジタル印刷機は、公立学校において、教材などの印刷に活用されています。たとえばテストの時、これまで子どもたちは黒板に書かれた試験の内容を書き写すところから始めなければなりませんでした。時間がかかりますし、後ろに座っている子どもは黒板の字が見えなかったのです。今は、試験用紙が配られますので、「勉強に使える時間が増えて嬉しいです」と子どもたちは喜んでいます。



© D.Davaanyam/SCJ

Mongolia
［ モンゴル ］

モンゴルの幼稚園でも、ポジティブ・ディシプリンが広まっています。

幼稚園の先生のお話です。「園児が昼寝の準備をしたくないと泣いている日がありました。今までだったら、『ちゃんとやりなさい！』と無理強いしていましたが、ポジティブ・ディシプリンを学んでから強制しなくなりました。泣いていた子は、周りの子どもから学習し、『幼稚園のルールだから自分もやらなくちゃ』と、今では昼寝の準備ができるようになりました。同じ結論でも、自分で学習するのと私に叱られてやるのでは、大きな違いですよね！」



Burkina Faso
［ ブルキナファソ ］

西アフリカのブルキナファソ・サヘル州において、緊急食糧支援を開始しました。

サハラ砂漠の南に位置する国々では、干ばつによる食糧不足と価格の高騰で1,840万人以上が影響を受けており、SCJは2012年8月から、ブルキナファソで緊急支援を実施しています。3～12歳の子どもを対象とした給食の提供、母親への栄養・衛生教育、各世帯への食糧配布を行い、子どもが栄養のある食事を取れるようにします。さらに、3～5歳の子どもを対象に保育所を設置し、食事を提供する場をつくり、大人が農作業などに専念できる時間を確保します。



Kenya
［ ケニア ］

干ばつを経験した子どもたちが、減災について考え話し合いました。

2011年夏の大干ばつ以来、水・衛生分野を中心に緊急支援を継続中ですが、子ども参加による減災教育も行いました。子どもたち自らが、干ばつによるリスクと減災の方法を考える取り組みです。「干ばつが長期化すれば家畜は死ぬので、家畜を早く売って現金に換えればいい」とか、「家族の現金収入のため女子が強制的に結婚させられることがあったけれど、子どもを手放さずに家畜を売るよう大人たちに訴えたい」という声があがりました。

各国活動の進捗・報告

活動国における支援の進行状況や
結果などについて、その一部をお知らせします。
ケニアにインド、モンゴルに日本と、
各国の子どもたちの活躍と
その声をお届けします。



Save the Children JAPAN

今回お伝えしたブルキナファソ、ケニアの活動はジャパン・プラットフォーム（JPF）から、モンゴルの活動は、外務省・日本NGO連携無償資金協力から助成を受けています。

＊みんなの広場＊

冊子「ＳＣＪ」は、私たちの活動をもっと丁寧にお伝えし、皆さまに共感いただくこと、
また、世界の子どもたちをはじめ、ＳＣＪに関わるすべての人のことを皆さまの近くに感じていただくことを目指しています。
この「みんなの広場」では、ＳＣＪからのお知らせをはじめ、皆さまからのメッセージも掲載いたします。

個人寄付者の皆さまへ、「寄付金控除」についてのお知らせです。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは内閣府より公益社団法人の認定を受けています。皆さまからのご寄付は寄付金控除の対象となり、確定申告により、所得税の税額控除または所得控除が受けられます。寄付控除の詳細につきましては、最寄りの税務署などにお問い合わせください。

※所得税の税額控除は、より大きな金額の還付が可能となります。
※お勤め先の年末調整では申請できませんので、ご注意ください。

また継続ご支援者の皆さまには、1月から12月末までにいただきました寄付金の合計金額を記した証明書付き領収証を、2013年1月末ごろにお届けいたします。

Save the Children JAPAN

未使用切手と書き損じはがき、695,143円分が集まりました！

今年もたくさんの「書き損じはがき」と「未使用はがき・切手」をお寄せいただき、ありがとうございました。
これからもぜひお送りいただけますと幸いです。
SCJの住所は裏表紙の下、「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン書き損じはがき係」まで。
SCJの活動費として活用させていただきます。

Save the Children JAPAN

前号のニュースレターの感想をいただきました。

「モンゴルの先生の子育て奮闘記、大変興味ぶかく拝読しました。モンゴルと言うと相撲界では、横綱をはじめ関取が増えて少し身近になりましたが、モンゴルの学校の情報、子どもたちの様子など、ほとんど初めて知ったようなものです。女の子の服装、衿などの刺しゅうやヘアバンドも美しいですね。子どもたちの笑顔に心から幸せな未来を、と祈ります」　2004年から継続寄付をいただいている星野佳世さんより



Save the Children JAPAN

ベトナムから、こんにちは。

ベトナム駐在員の新井です。
ベトナム事務所では、
お母さん職員のために
託児所が設置されました！
私も今年2月に生まれた娘を
預けながら勤務しています。
完全母乳育児ができるように
サポートされているんですよ。



Save the Children JAPAN

ご支援者の皆さまへ

ご住所、電話番号、メールアドレスなど、ご変更がありましたら、メール(donation@savechildren.or.jp)もしくは裏表紙下の電話番号に、必ずご連絡をお願いいたします。

Save the Children JAPAN

＊「みんなの広場」へのご投稿について＊

メッセージやご質問など、郵便か電子メールでお送りください。送り先は裏表紙、「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン ニュースレター編集係」宛。メールアドレスはvoice@savechildren.or.jpです。ご連絡先も明記ください。いただいた個人情報は責任を持って厳重に管理させていただきます。

＋編集者のコラム＋

『SCJ61』を最後まで読んでくださり、ありがとうございました。
今回の冊子はいかがでしたでしょうか。ご意見・ご感想をいつも楽しみに待っています。
ところで、特集国のミャンマーの写真で「おや？」と思われた方も多いでしょう。
子どもたちやお母さんたちが顔に塗っている白いモノは、
「タナカ」という、木片をすり、水を加えて使う化粧なんですよ。
これを塗れば清涼感があって、日焼けの防止になるそうです。
塗り方も人それぞれのようで、暑いところに生活する人たちの暮らしの知恵ですね。
さて、2012年も残りわずかとなりました。今年もあっという間だった気がします。
SCJを支えてくださる皆さまに感謝いたします。来年の『SCJ』もぜひお楽しみに。

「SCJ」編集担当／岡田茜



Stakeholder Interview & Information

＜特別インタビューとお知らせ＞



SHISEIDO

株式会社 資生堂　CSR部
岸部　二三代 様

「資生堂全体に社会貢献活動を浸透させたいです」



資生堂は、社員一人ひとりが社会問題の解決への視点を持つような企業風土をめざしています。そのための社会貢献活動として、寄付とボランティアの両方の活動を浸透させることに力を入れています。その中でＳＣＪには、社員や有志の方々のご寄付と会社からのご寄付で構成される『花椿基金』を通して、ミャンマーの子どもの栄養改善の取り組みにご支援をいただいているほか、社員の方々に事務所にお越しいただき、ボランティアとして、私たちの業務をサポートいただいています。「お金での貢献も大切ですが、社員がオフィスの外で新しい出会いと経験を積み、さらにそれを日々の業務に活かしてくれればと考えています」とのこと。2012年、資生堂は創業140周年の節目を迎え、今年は社員全員が自主的にボランティア活動に参加しているそうです。「資生堂をいつも支えてくださっている皆様と社会にお返しをする気持ちで、会社全体でボランティアに取り組んでいきます」と話してくださいました。

柏レイソルが、SCJを全面的にサポートくださっています。

KASHIWA Reysol

プロサッカークラブの柏レイソルからは、ベトナム山岳地域に暮らす少数民族の子どもたちの教育事業に対してご支援をいただいているほか、ユニフォームやホームスタンドにSCJのロゴを掲出いただくなど、広報PR活動にも積極的にご協力いただいています。さらに、アカデミーコーチの方々に向けて、SCJスタッフが「子どもの権利」に関するワークショップを開催させていただいています。



http://www.reysol.co.jp

エコシステムグループが、ベトナムの子どもを応援してくださいます。

ESG Eco System Group

太陽光発電システムやオール電化住宅製品の販売・施工を行うエコシステムグループは、「未来の地球と未来の子どもたちのためにできること」をテーマに様々な社会貢献活動を実施しています。SCJは、お客様の太陽光発電システムの施工、もしくはエコキュートの設置のつど、1軒につき5,000円をご支援いただいています。ご寄付は、ベトナムの子どもたちのために役立たせていただきます。



http://www.ecofamily.co.jp/

トーマンコーポレーションのご支援でミャンマーに保健センター設立へ。

TOMAN Toman Corporation

トーマンコーポレーションからは、今回のニュースレターで特集したミャンマーにおける、「人材育成を通じた母子保健システムの強化」事業に対してご支援をいただいています。具体的には、保健センターの建設においてご支援をいただき、農村地域の母子保健の基礎的なサービスを強化することで、妊産婦および乳幼児の死亡率を削減する活動にご協力をいただきます。

（※写真はモデルです。）



http://www.toman-c.co.jp/

発行：公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル 4F　ご支援に関するお問い合わせ：03-6859-0068（平日 9:30-18:00）

2012年 11月発行　印刷協力：星光社印刷株式会社